

バッハ盤を聴く(5)(HP 収載)
—最新アナログシステムでの試聴(5)—

1. 始めに

前報(4)に引き続き、バッハのアナログ盤を聴き直していきます。

2. バッハのアナログ盤の試聴方法

試聴システムは LINN LP-12 の再構成(35)および ThorensTD124 の再構成(1)で報告したとおりであり、今回も 1970 年代後半以降の新興レーベルを ThorensTD124 で聴いていきます。その後、さらにアンチスタティックの効果(1)とアンチスタティックの効果(2)で報告したようにレコードアンチスタティックも加わっています。

今回は、次のレーベルを聴いてみます。

CBS SONY 20AC 1912 (モノラル)

J.S.バッハ 無伴奏ヴィオリンパルティータ
ヘンリク・シェリング (ヴィオリン)

CBS SONY SOCL 106

J.S.バッハ 二声と三声のインヴェンション
グレン・グールド (ピアノ)

SERAPHIM S-60248

J.S.バッハ カンタータ第 80 番《われらが神は堅き砦》BWV8
カンタータ第 79 番《主なる神は日なり、盾なり》BWV79

Wolfgang Goenenwein 指揮 Consortium Musicum

TOKYO FM

J.S.バッハ 無伴奏チェロ組曲
ピエール・フルニエ (チェロ)

3. バッハのアナログ盤の試聴結果

CBS SONY 盤は、ZANDEN のリストでは、米国盤は Columbia、R、第 4 時定数 Low に、国内盤は Columbia、R、第 4 時定数 High となっています。

CBS SONY 盤の無伴奏ヴィオリンパルティータはモノラルですので、ZANDEN のリストに相当するものではありませんが、ステレオの国内盤の Columbia、R、第 4 時定数 High で聴いていきました。特に違和感はありませんが、位相を R→N にすると音が散漫になります。第 4 時定数を High→Low にすると音が鈍りますので、元の Columbia、R、第 4 時定数 High にしますと、モノラルとは思えないほど浸透力の

ある音で、シェリングらしい端正でオーソドックスな演奏です。クレジットをみると録音時期は不明であるが、デジタルリマスタリングをしたものと記載されています。CBS SONY 盤の二声と三声のインヴェンションはステレオの国内盤の Columbia、R、第4時定数 High で聴いてみましたが、違和感なく、グールドらしい端正で独創的なピアノのバッハを聴かせてくれます。また、グールドの小声のハミングも聴き取れます。

SERAPHIM 盤は、ZANDEN のリストでは、EMI、R、第4時定数 Low となっていますので、SERAPHIM 盤の S. バッハのコンタータは、EMI、R、第4時定数 Low で聴いていきましたが、特に違和感はなく、ソリストの歌唱はよく響き、通奏低音も明瞭です。

TOKYO FM 盤のチェロ組曲は、ZANDEN のリストには記載がありませんが、1972年の虎の門ホールにおけるライブ録音ですので、RIAA、N、第4時定数 High から聴き始めます。まず、チェロの音が散漫ですので、位相を N→R にします。クレジットによれば、調整卓やレコーダーもアンペックスが使われていますので、試みにカッティングも米国式でないかと思い、RIAA→Columbia にしますと、よりチェロの音が鮮明でバランスもよいようなので、Columbia、R、第4時定数 High にしました。1972年のライブ収録と思えないほど鮮度感があります。

4. まとめ

ThorensTD124 の再構成(1)とアンチスタティックの効果(2)の結果をトレースでき、三つのレーベルのイコライザー特性が特定できました。

以上